

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究 (B)  
 研究期間：2007 ～ 2009  
 課題番号：19330142  
 研究課題名 (和文) 対人コミュニケーションを活用した社会的スキル・トレーニングの研究  
 研究課題名 (英文) A study of social skills training by application of interpersonal communication  
 研究代表者  
 大坊 郁夫 (DAIBO IKUO )  
 大阪大学・大学院人間科学研究科・教授  
 研究者番号：50045556

## 研究成果の概要 (和文)：

対人関係や組織の円滑化を図るために、コミュニケーション力の向上は必要となる。メッセージの適切な記号化、解読によって、自分の適応のみならず、社会的つながりを適切なものにする。そのためには、社会的脈絡を踏まえたコミュニケーションの機能を制御するスキルが必要である。そのために、対人関係を適切に運用することに関わる個人特徴とコミュニケーション特徴との検討、そして、効果的な SST について検討した。

## 研究成果の概要 (英文)：

We need to improve our communication skills to make for adaptive interpersonal relations and organizational activities. When we encode own messages and decode others' messages in appropriate manner, those communication behaviors lead to activate not only ourselves' adaptation but the high performance of many persons in own society. The development and practice of social skills training program to effort above adaptive expectation are attracted attention from contemporary social context for actualization of social well-being. The basic modules of social skills training are encoding and decoding messages to the improvement of interpersonal communication. Also, we need to control communication functions having insight to read the social context. This preliminary study investigated to identify personal attributes and communication characteristics that related to accurate decoding of interpersonal relationships. Useful suggestions for effective social skills training were discussed in relation to the role of interpersonal communication channels.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2008 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	10,000,000	3,000,000	13,000,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的スキル、社会的スキル・トレーニング、対人コミュニケーション、非言語コミュニケーション、会話、well-being、説得、感情

### 1. 研究開始当初の背景

近年、世代間の交流の難しさに限らず、円滑な対人関係の形成・維持が難しく、引きこもりになったり、ごく限定された「仲間」との関係しか結べない人が増えてきている。相互の疎通性の低下が見られ、それぞれのメッセージを十分に共有できず、ひいては社会としての紐帯の脆弱さを招きかねないであろう。このような状況を考えるならば、対人的な結びつきを回復し、相互の理解を促すための工夫が必要である。そこで、申請者は、基本的な問題として、対人コミュニケーションの能力を増やすことが重要であり、上記の社会的脆弱性を解決する基本と考えている。

対人コミュニケーションを社会的スキルの重要な要因と捉え、社会的な適応を促すためのトレーニング・プログラムの開発・実践は広く注目される場所である（津村, 1994；大坊, 2003, 2005年など）。個人が他者と効果的な関係をとるためには、メッセージの記号化・解読を正確に、迅速に行わねばならない。それは、適切な働きかけによって開発され、高められるものである。このようなスキル向上の実践は、注目される場所であるが、その方法は定まっていない。この研究では、これまでのコミュニケーション研究の成果を踏まえ、かつ、トレーニングが容易であり、それでいて実践力を備えたものであることを目指している。即ち、有効なプログラムを実施することによって、コミュニケーションの感受性を高められ、使用チャネルの拡大、言語的行動と非言語的行動との相互依存関係を把握した上での円滑な対人関係を遂行することが期待できる。

社会的スキルの構成要因の中心に位置づけられるのが、コミュニケーションの記号化と解読、さらに関係の目的と係わる自己主張である。この社会的スキルは社会的関係を担うすべての者に必要であり、大方は現状以上の水準を願っている。社会的不適応にある者への改善プログラムが必要である（相川, 2004年）と同様に、より簡便で日常的に実施できるスキル向上のプログラム作成を目指す必要がある。このような意図のもとに、これまで得た対人コミュニケーション研究を踏まえてプログラムを作成し、学生、一般市民を対象としてトレーニングを行い、その効果測定を行う。このことは、取りも直さず、基礎的研究成果を活用し、現実に役立つ応用

化、実践化を行うものである。

### 2. 研究の目的

コミュニケーション・チャネルの持つ相互関連的な働きについての理解を高め、また、ふだん意識されずに用いられているチャネルの意識化とその働きについてのフィードバック(1)、日本人の多くで抑制されている意図的な意思表示の強化(2)、そして、対人場面、小集団場面におけるコミュニケーションの記号化と解読力の実践的な活用(3)を目指すことが基本の目的である。本研究は、従来の基礎研究を日常的で実践的なものにすることを目指しており、社会的スキルは対人コミュニケーション力をベースにした階層性を持つものと捉え、多様な人々を対象として、実践的な効果のある、実施の容易なプログラムを開発する。具体的には、これまでの研究を踏まえて、(1)記号化と解読の循環的なトレーニング、(2)自己主張のトレーニング、(3)メタ・コミュニケーションを使うことに注目し、個人、2者間、小集団におけるスキル発揮を促す実践性の高いプログラム展開を目指す。これまで十分組織的に解明されていなかった対人コミュニケーションの個人-対人関係-集団という積み上げプロセスに着目し、1)コミュニケーション・チャネルの相補性の理解、2)顔面表情の記号化、解読の促進、3)自己主張、4)対人関係判断の手がかり性の解明と判断力、5)小集団におけるコミュニケーション（関係維持、課題解決力、リーダーシップ）の解読力向上等を目指す。

### 3. 研究の方法

対人関係の解読 対人関係の特徴を正確に解読するための要因を探ることにある。そのために、複数の対人関係タイプによる“自然な”コミュニケーション場面を収集し、それを大学生に提示して、関係の解読を求めたものである。特に、関係解読の非言語的手がかりについて検討した。

方法 **研究1**：対象者と時期 関西地区の大学の実習の一環として、男女大学生 44名（2回生；男 11名、女 33名）を対象とした（平均年齢 20.0歳±0.65）。

提示刺激 24種類の映像を提示した。この素材映像は、関西、関東で撮影されたものであり、大学キャンパス、街頭、職場、一般家庭で当事者の許可を得て撮影された映像（1関係シーン約5分程度の約50種類の素材のう

ち、各関係シーンの20秒をクリップした；無音)を素にして作成した(DESIREJ)。なお、関係の種類内訳は、血縁関係(きょうだい、親子)3, 友人・同輩10, 恋人・夫婦6, 上下(上司部下・先輩後輩)関係4, 初対面1種類である。なお、回答を求めた設問は、関係の種類5種類, 当該関係の期間, 判断の手がかり(コミュニケーション特徴)である。

測度 個人の社会的スキル特徴として、非言語的な表出性を測定するACT(表出性とともに、解読スキルとの一定の正の相関関係がある), 社会的外向性を測るMPIの社会的外向性尺度を用いた。

研究2: 対象者と時期 関西地区の大学の心理学研究室の、男女大学生・院生30名(男10名, 女20名)を対象とした(平均年齢22.3歳±2.64)。刺激映像を無音で提示し、提示順序を相殺し、研究1と同様な手続きで行い、求めた回答内容も研究1と同一である。

なお、27シーンをランダムに編成し、実施に際しては、参加者を分割して、映像提示順序は相殺した(順:14名, 逆:16名)。

測度 個人の社会的スキル特徴として、非言語的な表出性を測定するACTを用いた。

研究3, 4: 社会的スキル・トレーニング 2007年度までの5年間にわたり、放送大学の面接授業として、SSTを連続する2日間で実施した。この実習では、自分の意思を的確に伝え(記号化)、相手の意思を正確に読みとれること(解読)を中心とした基礎的な社会的スキルの充実・向上を目標に据えた。2日間のうち1日目(約4時間)は、ペア単位での実習を中心に、自らのコミュニケーション・スタイルを把握し、非言語コミュニケーションの意義や機能を再確認させるような課題を選定した。2日目(約6時間)は小グループによる実習を中心に、多様なチャネルを駆使して、記号化と解読、自己主張と傾聴のバランスの重要性に気づかせるような課題を選定した)。

表1 対人関係解読のための質問内容

1. 2人の関係は？  
 1. 初対面 2. 血縁関係(親子、きょうだい) 3. 友人、同僚・同輩 4. 先輩(上司)(目上)・後輩(部下)(目下) 向かって a)右が先輩/上司/目上 b)左が先輩/上司/目上 5. 恋人、夫婦  
 2. 2人の関係の長さは？  
 1. 1年以内 2. 1~5年 3. 5年以上  
 3. この二人の関係を判断した手がかりは、以下のどれですか？(複数選択可)  
 1. 手の動作 2. 脚の動作 3. 胴体動作 4. 話し方  
 5. 身体接触 6. 視線 7. 顔の表情 8. 対人距離  
 9. その他( )

#### 4. 研究成果

研究1, 2 非言語手がかり 1シーン平均の個人差があり、選択手がかり数は、1.9から5.9種類であった。判断の手がかりとしては、話し方、顔の表情、視線、対人距離が多く使用されていた。脚・胴体動作は少ない(図1)。

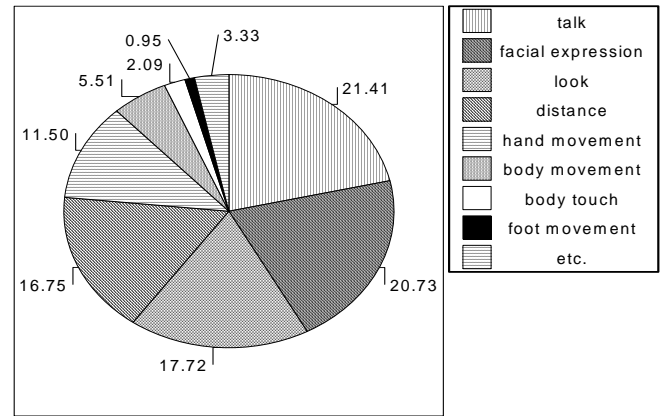


図1 用いられた解読の手がかりの比較

解読の手がかりと個人特徴との関係 社会的外向性(E)は、胴体の動作と(.38,  $p < .01$ )、ACTは、手の動作(.40,  $p < .01$ )、脚の動作(.31,  $p < .05$ )と正の有意な相関関係を示し、一方、話し方とは負の関係(-.32,  $p < .05$ )にあった。外向的な者ほど胴体の動作により多く注目し、また、表現力の豊かな者ほど手・脚の動作に注目するが、話しぶりには注意を向けていない。この種のシーンでは、眼前の相手に集中した注意を向けており、全体的に視線を向け、話しかけることが「前提」となっている。それ故にこそ、社会的スキルの高い者ほど、姿勢にも通じる身体動作、距離に敏感であろう。意図性の高い発話ではなく、意図性の低い手脚の動作に注目することは、関係をより識別できる手立てと言える。

表2 解読の正確さ(高低)別に比較したACTと選択した手がかりとの相関関係

(a) High accurate decoders										
cue	hand	foot	body	talk	touch	look	facial ex- pression	distance	etc.	
ACT	.06	-.13	.44†	.28	-.25	-.03	-.03	.48†	.60*	N=15
(b) Low accurate decoders										
cue	hand	foot	body	talk	touch	look	facial ex- pression	distance	etc.	
ACT	.32	.14	.42	.12	.27	.49†	.39	.40	.13	N=15
† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$										

また、初対面者と家族(夫婦、きょうだい)、友人関係シーンを多く提示した同様の研究では、最大の正解読率を示したのは、血縁関係であり、親子関係(母・息子, 父・息子;96.6%)であった。次いで、祖母・孫関係であった(93.1%)。全体的には、血縁関係(親子、祖母孫などの8シーン)が71.1%, 初対

面が49.6%、きょうだいが29.6%、夫婦は60.4%であった。ただし、個々のシーンによって正解読率は多様である。初対面の関係のうち、男性同士の場合にぎこちなさが強く、手がかかりとなりやすい故か概ね正解読率は高めであるが、女性同士では相対的にコミュニケーションがスムーズであり（視線、発話が多い）、他の関係と誤読されやすい。従来から言われているように男性よりも女性の親和性が強いことも関連していると言える。また、きょうだいの場合にもスムーズなコミュニケーションであり、友人と混同されやすかった。

非言語手がかり 関係の解読率について対象者高低2群に分割して検討した。高正解読群は、胴体動作、対人距離、その他（顔の類似、部屋の様子、年齢差など）を多く用いている。低群では、視線のみが有意な傾向を示しているに留まっており、関連は弱い。なお、使用手がかりの多少についての検討では、手がかり多群は、ACTが高いほどより多くの手がかりを使用する ( $t=53, p<.05$ ) こと以外に有意な関係は見られない。なお、手がかり多用群は使用少群よりもACT得点が有意に高いことも示された（多用群 75.80、少群 58.13,  $F(1, 28)=9.93, p<.01$ ）。

対人関係の解読には、対人コミュニケーションの手がかりが有効であること、「きょうだい」は解読の難しさがあること、初対面の場合には男女差がみられ、そこには女性の親和性の高さが影響していることなどが示された。手がかりとなるチャンネルとしては、身体動作/ジェスチャー、対人距離が有効であることも示唆された。身体的な動きがどの程度展開されるのかが関係判断に作用するところが大きい。

**研究3 短期的な社会的スキル・トレーニングの社会人に対する応用可能性について検討した。**1)参加者がトレーニングの目的を強く意識せず、ゲーム感覚で取り組むことができる、2)トレーニングの場において、参加者自身が自分のコミュニケーション・スタイルについて気づきを得ることができる、3)ファシリテーターの技能がトレーニングの効果にそれほど影響せず、その役割は参加者の発見や気づきを促すことにある。

参加者：181名（男性50名、女性131名）を分析の対象とした。年齢を記入することに了承した173名の平均年齢は42.84歳 ( $SD=11.80$ ) で、10代~70代に渡る。

方法：ファシリテーターとして、各年度3~5名（参加者は各年度35名程度）のスタッフが加わった。ファシリテーターには必ず男女が最低1名含まれるようにした。ファシリテーターは各モジュールでの進行の補助に加えて、参加者に対して新たな体験を通じて感じたことや考えたことについて発言を促し、参加者間で共有できるよう支援するよう

な働きかけを行った。参加者には、SSTの効果を自ら確認できるようにするため、実習の開始時、1日目終了時、2日目終了時の計3回、複数の社会的スキル尺度への自己報告を求め、その結果を自己採点してもらった。参加者に回答を求めた社会的スキル尺度は、ACT(大坊, 1991)ならびにJICS(Takai & Ota, 1994)であった。JICSは、察知能力(PA)、自己抑制(SR)、階層的関係調整(HRM)、対人感受性(IS)、あいまいさ耐性の低さ(TA)の下位尺度からなる。JICSではACTで十分にカバーできない解読能力、とりわけ日本人に特有の察しに関わる能力の測定ができる。

さらにSSTの効果を確認する補完的な指標として、各日の実習終了時にSSTに対する感想やSSTを通じた自らの気づき・変化等について自由記述する、「ふりかえり用紙」への回答も求めた。

2日間のうち1日目(約4時間)は、ペア単位での実習を中心に、自らのコミュニケーション・スタイルを把握し、ノンバーバル・コミュニケーションの意義や機能を再確認させるような課題を選定した。2日目(約6時間)は小グループによる実習を中心に、多様なチャンネルを駆使して、記号化と解読、自己主張と傾聴のバランスの重要性に気づかせるような課題を選定した。

表3 SSTによる社会的スキル得点の変化

測定尺度	1日目(開始時)		2日目(1日目終了時)		3日目(2日目終了時)				
	M	SD	M	SD	M	SD			
ACT (非言語的表出性)	60.67	(15.25)	a	65.59	(16.36)	b	67.91	(16.21)	b
PA (察知能力)	20.38	(3.94)	a	20.93	(4.21)	b	21.24	(4.44)	b
SR (自己抑制)	23.21	(4.40)	a	23.60	(4.36)	a	24.26	(4.70)	b
JICS HRM (階層的関係調整)	11.98	(1.98)	a	12.18	(1.94)	a	12.47	(1.88)	b
IS (対人感受性)	8.43	(2.31)	a	8.75	(2.28)	b	9.03	(2.24)	c
TA (あいまいさ耐性)	10.16	(2.32)		10.19	(2.16)		10.02	(2.45)	

\*a, b, c: 異なるアルファベットを付した箇所は有意差があったことを示す。N=181

トレーニング開始時よりも後で多くの尺度得点が増加しており、参加者は自分がスキルフルになったと認知していた。

尺度得点の変化について検討すると、1日目終了時にSSTの効果が見られた尺度(ACT, PA, IS)と、2日目終了時になってはじめて効果があらわれた尺度(SR, HRM)、効果が認められなかった尺度(TA)があった。この尺度間での変化パターンの違いはSSTのプログラム構成を反映したものとも考えられる。1日目のプログラムは非言語要素への気づきを促すモジュールを中心に構成されており、非言語的表出性や察知能力、対人感受性といったスキルが参加者に意識されやすかったと考えられる。これに対し、2日目のプログラムでは、小グループでの体験を通して状況に応じた意思表示を行うといった要素が参加者に認識されやすかったと思われる。そのため2日目になってはじめて自己抑制や階層的関係調整のスキルの向上が認められたのであ

ろう。なお、TA（についてのみ得点の変化が認められなかった。本報告で実施したSSTでは、非言語要素への注目や、他者との価値観の違い、コミュニケーション・スタイルの違いを参加者に気づかせることに主眼を置いたため、自分の意見を白か黒か明確にしようとか、それをはっきりと主張しようといった、意識・行動レベルでの変化には結びつかなかったと考えられる。

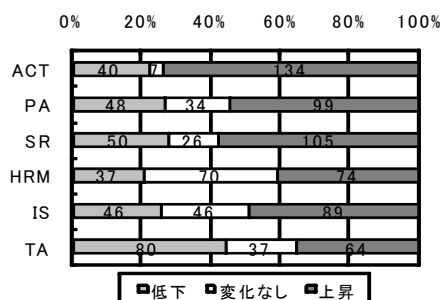


図2 得点変化の分布(図内の数字はM)

全体では、SSTによって参加者の社会的スキルが(あいまいさ耐性の低さを除けば)軒並み上昇したが、SSTの効果は全参加者一様の上昇ではない。本研究で用いた各尺度の得点変化パターンを見るため、参加者の尺度得点の変化量を示した(図2)。

ACTは全体の7割程度の参加者の得点が上昇した。またPAやSRでも6割近くの参加者で上昇した。これに対し、HRMやTAなどでは全体の4割程度が上昇するにとどまった。

SSTを通じて社会的スキルが向上したと認知する参加者が多かったものの、一部に社会的スキルが低下したと認知する参加者もいた。このような現象は、SSTでの様々な体験を通して、自分の社会的スキルの不十分さを認識するといった社会的スキルに対する感受性の高まりと理解することができる。

#### 研究4 企業研修としての社会的スキル・トレーニング

企業の新規採用者を対象とした研修会において、2日間(各4時間)のコミュニケーション力の向上を意図したトレーニングを行った。対象者は、東京218名、大阪207名。

表4 実施したプログラム

1st Day		2nd Day	
1	小講義(1)	7	小講義(2)
2	自己紹介ゲーム	8	対人関係の解説
3	電話と視線	9	問題解決
4	顔の表情	10	社会的スキルの把握
5	同一性を探る	11	スキルの測定2/ふりかえり
6	スキルの測定1/ふりかえり		

自己評価の尺度としては、ACT、JICS、ENDE2(記号化と解釈スキル、堀毛、1994)、HSQ(対人的な配慮、共感性を測定する、大坊・池崎、

2005)を用いた。

研究3と同様に、トレーニングの前後で社会的スキル尺度の得点は概ね向上していた。参加者全体の5~6割が研修終了時点で社会的スキルが向上したと認識していた。

プログラムの効果は、特に、HRMやISに強く表れているが、得点変化は一様ではなく、東京、大阪の違いを超えて、上下動が見られている。このことから、職種、勤務後の職場への適応等の追跡的な検討が必要である。

なお、新入社員研修後のふりかえりでは、自己紹介、業務での接客、会議や打合せの場面で活用できるとの意識があらわれていた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計19件)

- ① 大坊郁夫、横山ひとみ、磯友輝子、谷口淳一 社会的スキル・トレーニングにおける対人関係解説-DESIREJの作成に向けて-、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、110(33)、85-90。
- ② 大坊郁夫 Well-beingを目指す対人コミュニケーションの研究、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、109(457)、2010、35-36。
- ③ 大坊郁夫 ポジティブな人間関係研究の展開、現代のエスプリ、査読無、512、2010、109-119。
- ④ 藤原 健・大坊郁夫 覚醒度の異なるポジティブ感情の対人会話場面における認知・行動調整機能-会話満足度、および手の動きについての検討-、感情心理学研究、査読有、17、2010、180-188。
- ⑤ 後藤 学・大坊郁夫 短期的な社会的スキル・トレーニングの実践 社会人への適用を目指して、応用心理学研究、査読有、34、2009、193-200。
- ⑥ 大坊郁夫・堀毛一也・相川 充・安藤清志・大竹恵子 well-beingを目指す社会心理学の役割と課題、対人社会心理学研究、査読有、9、2009、1-31。
- ⑦ 村山 綾・大坊郁夫 上司のリーダーシップ機能、作業チーム内の葛藤、および対処行動の影響過程に関する検討。応用心理学研究、査読有、33、2008、120-127。
- ⑧ 藤本 学・大坊郁夫 小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の影響、実験社会心理学研究、査読有、41、2008、51-60。
- ⑨ Masanori Kimura, Ikuro Daibo, & Masao Yogo The study of emotional contagion from the perspective of interpersonal relationships. Social Behavior and

- Personality, 査読有、36, 2008、27-42.
- ⑩ 大坊郁夫 社会的スキルの階層的概念、対人社会心理学研究、査読有、2008、1-6.
  - ⑪ 後藤 学・大坊郁夫 中国人大学生が苦手・得意とするコミュニケーション場面に関する研究、対人社会心理学研究、査読有、8、2008、43-50.
  - ⑫ 毛 新華・大坊郁夫 社会的スキルの内容に関する中国人大学生と日本人大学生の比較。対人社会心理学研究、査読有、8、2008、123-128.
  - ⑬ 大坊郁夫・松田昌史・磯 友輝子 対面場面における相互作用形態と課題解決との関係、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、108(26)、2008、7-12.
  - ⑭ 上出寛子・大坊郁夫・谷口淳一・磯 友輝子 非言語的コミュニケーションによる対人関係の解読～社会的スキルとパーソナリティの関連から～、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、108(26)、2008、13-18.
  - ⑮ 横山ひとみ・大坊郁夫 説得場面における社会的スキルの役割(2) ～音声・映像提示刺激による実験的研究～、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、108(187)、2008、53-56.
  - ⑯ 横山ひとみ・大坊郁夫 話し手の認知に及ぼすスピーチ速度の影響—話し手の信憑性および知覚された説得力に注目して—、対人社会心理学研究、査読有、8、2008、65-70.
  - ⑰ 藤本 学・大坊郁夫 コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み、パーソナリティ研究、査読有、15、2007、347-361.
  - ⑱ 藤本 学・大坊郁夫 小集団コミュニケーションにおける話者の叙述パターン、社会心理学研究、査読有、23、2007、23-32.
  - ⑲ 村山 綾・大坊郁夫 課題解決集団内における2種類の葛藤メンバーの影響力の差と時間制限が集団内葛藤知覚に及ぼす影響—、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、2007、107(No308)、51-56.
- [学会発表] (計8件)
- ① Ikuo DAIBO, Yukiko ISO, Hitomi Yokoyama, and Junnichi Taniguchi、The role of nonverbal communication in social skills training, Psychological Studies, 54(4), 332. AASP 6th Biennial Conference B199、2009. 12. 13
  - ② Hitomi Yokoyama and Ikuo Daibo How do we persuade others? The amount of utterance, hand movements and posture of nonverbal behavior Psychological Studies, 54(4), 312. AASP 6th Biennial Conference B200、2009. 12. 13
  - ③ Ikuo DAIBO Decoding skill of nonverbal communication in interpersonal settings BPS Annual Conference 2009, Brighton Seafront, U.K. 2009. 4. 3
  - ④ Hitomi Yokoyama and Ikuo Daibo The role of social skills in persuasion—An experimental study using an audio-visual message— BPS Annual Conference 2009 Brighton Seafront, U.K. 2009. 4. 3
  - ⑤ Xinhua MAO and Ikuo DAIBO The effect of social skills training for Chinese undergraduates—holding effects from 3-month follow-up investigation—BPS Annual Conference 2009 Brighton Seafront, U.K. 2009. 4. 3
  - ⑥ Hitomi Yokoyama and Ikuo Daibo The role of social skills in persuasion 10th Society for Personality and Social Psychology SPSP2009 Tampa, Florida p.332-333. 2009. 2. 5-7
  - ⑦ Ikuo Daibo, Yukiko Iso, Junnichi Taniguchi & Hiroko Kamide, Effects of Nonverbal Communication in Social Skills Training XXIX International Congress of Psychology, Berlin International Journal of Psychology, Vol.43(3/4) p.449, 2008. 7. 23
  - ⑧ Yukiko Iso, Yuu Kasagi, & Ikuo Daibo, The effect of videotape feedback of a dyadic interaction on meta-accuracy, XXIX International Congress of Psychology, Berlin. International Journal of Psychology, Vol.43(3/4) p.458, 2008. 7. 23
- [図書] (計2件)
- ① 大坊郁夫・永瀬治郎編 ひつじ書房、関係とコミュニケーション、2009、178
  - ② 大坊郁夫 感情と文化—顔コミュニケーションの様相(鈴木直人編 朝倉書店、感情心理学、第7章、110-134.)、2007
6. 研究組織
- (1) 研究代表者  
大坊 郁夫 (DAIBO IKUO)  
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授  
研究者番号：50045556
  - (2) 研究分担者 なし
  - (3) 連携研究者 なし
  - (4) 研究協力者  
磯 友輝子 (ISO YUKIKO)  
東京未来大学・心理学部・講師  
研究者番号：00432435  
谷口 淳一 (TANIGUCHI JUNICHI )  
帝塚山大学・心理福祉学部・准教授  
研究者番号：60388650